

笑林

後漢 邯鄲淳撰

解説

後世から見て笑話の範疇に入れられる小話なら、すでに先秦諸子の書物の中にも散見している。だが、笑話を意図的に収集してできた一つの書物となると、二世紀、後漢から魏にかけての邯鄲淳の編とされる『笑林』がその最初である。『笑林』は、『隋書』経籍志子部「小説家」に「笑林三卷 後漢給事中邯鄲淳撰」と記録され、また『旧唐書』経籍志丙部子録「小説類」に「笑林三卷 邯鄲淳撰」、『新唐書』芸文志丙部子録「小説家類」に「邯鄲淳笑林三卷」と見える。もともと三卷からなる書物であったようだが、その後散逸し、現在見られるのは、『太平御覧』『太平広記』などの資料から清の馬国翰が二十六条を輯佚した『玉函山房輯佚書』所収本、そして魯迅が『玉函山房輯佚書』所収本をもとに、さらに三条を補った『古小説鈎沈』所収本、王利器『歷代笑話集』所収本などである。

邯鄲淳は、後漢から魏にかけての人。『三国志』魏書王粲伝に、

潁川えいせうの邯鄲淳、陳留の路粹、沛國はいこくの丁儀、丁廙、弘農の楊脩、河内の荀緯じゆんい等もまた文采があつたが、この七人の仲間には加えていない。

と見える。七人というのは、孔融、陳琳、王粲ら、後漢末の建安年間に曹操父子のもとで活躍した七人の文学者、建安七子を指す。『三国志』のこの条の裴松之注に引く『魏略』には、邯鄲淳の詳しい伝が見える。邯鄲淳、またの名を邯鄲竺ともいい、字は子叔。潁川（河南）の人。博学で文章に秀で、『説文解字』など文字学にも通じていた。後漢末の大学者として知られ、曹操は彼を厚遇し、曹操の子の曹丕も彼を招こうとした。ある時、曹操は曹丕の弟である曹植のもとに邯鄲淳をつかわした。邯鄲淳がやってくると、曹植は大喜びし、まず水で体を洗った後、顔に白粉をつけ、頭には何もかぶらず、肌脱ぎになって、胡舞を舞い、玉や剣を用いた曲芸をやった上で、俳優小説数千言を誦えて見せ、「邯鄲生どの、いかがかな」と言った。それから儀容を整え、「混元造化の端」「品物区別の意」さらには「羲皇以来賢聖名臣烈士優劣の差」「古今文章賦誄」「官に当たりての政事の宜しく先後すべき所」「用武行兵倚伏の勢」を論じ、それから食事になった。邯鄲淳は、曹植の才にすっかり圧倒され、「天人」だと言った。『魏略』の伝には、そんなエピソードが残っている。曹植の特異な才能をあらわすために引き合いに出された格好であるが、曹植がわざわざ邯鄲淳の前で「俳優小説数千言」を述べ立てたのは、あるいはその『笑林』の存在を知っていたからかもしれない。やがて曹丕が文帝となって魏を建国すると、博士給事中に任じられ、「投壺賦」千余言を奏上し、絹千匹を賜ったという。

文章に通じ、文字学にすぐれた学者として知られる人物であったが、そうした邯鄲淳が笑話集を編纂した。時は後漢末期の混乱の時代、まさしく『世説新語』や後世の小説『三国志演義』の舞台となった時代である。邯鄲淳は、この混乱の時代に、笑いを武器にして、何事かを言わんとしているのである。中国最初の笑話集がこのような時代に編纂されたことはなかなか興味深い。『笑林』のどの一条を見ても、笑いに加え

て、教訓的な意義を読み取ることができないこともない。それにしても、現存する『笑林』の話には、食べ物にまつわる話が多いように思われる。いったいどのような背景があるのだろうか。

ここでは魯迅の『古小説鈎沈』所収本の順序に拠りながら、収録された二十九条をすべて掲げることにする。本文の文字は原典に当たり直して定めた。第十一条について、魯迅は『芸文類聚』及び『太平御覧』を底本とし、二条に分けて載せていたが、『太平広記』によって一つにまとめておさめた。二十八条になつてゐるのはそのためである。

現代語訳



魯に長い竿を持って城門を入ろうとするものがあつた。最初立てて持ってみたが入れない。横にして持ってみたが、やはり入れず、どうにも方法がなくなつてしまった。そこへ一人の老人があらわれて言った。

「わしは聖人というわけではないが、世の中の多くのことを見てきておる。のこぎりで真ん中を切つて入ればよいのじゃ。」

かくして、言われたとおりに切つた。

原文

魯有_下執_二長竿_一入_二城門_一者_上。初_レ豎_レ執_レ之、不_レ可_レ入、横_レ執_レ之、亦不_レ可_レ入、計無_レ所_レ出。俄有_二老父_一至_二曰、吾非_二聖人_一、但見_レ事多

書き下し文

魯に長竿を執りて城門に入らんとする者有り。初め豎にして之を執るに、入るべからず、横にして之を執るも、亦た入るべからず、計の出づる所無し。俄かに老

矣。何不_二以_レ鋸中截而入_一。遂依_レ而截_レ之。

父の至る有りて曰はく、吾は聖人に非ず、但だ事を見ること多し。何ぞ鋸を以て中截して入らざる、と。遂に依りて之を截る。

語注

○魯_二地名。山東省。孔子の生まれた地方である。○豎_二立てる。○計_二方法。計策。○俄_二にわか。○不_二以_レ鋸中截而入_一。○老父_二老人。○何不_二どうして_レしないのか。○すべきである。○截_二(細長いものを)断ち切る。○遂_二かくして。そのまま。

【余説】『太平広記』卷二六二「嗤鄙五 魯人執竿」の一条。まずは長い竿を豎にし横にし、城の門を入れないという者も愚かであり、次に、長い竿を切断すれば門を通れるだろうという老人もまた愚かであり、そして、その老人の言うことに従うものが、またさらに愚かであつて、どたばた喜劇を見る趣がある。しかし、実際のわれわれの生活において、愚かなアドバイスを喜んで受け入れ、実行していることがあることを思うと、ひやりとさせられる一段である。特に「世の中の多くのことを見ている」と称する先達の発言を盲目的に信賴してことを行う場合など。なお、老人がわざわざ「わしは聖人というわけではないが」と断るのは、聖人孔子の出身地である魯の地方のことだからであろうか。この話とその類話については、澤田瑞穂『笑林閑話』(東方書店、一九八五)「雨傘の柄……バカな男のはなし……」がある。

現代語訳



齊の人が、趙の人について瑟を学んだ。まず調律をしてもらい、琴柱を膠でかためて齊に帰った。三年たつたが一曲も弾けない。齊の人々はそれを不思議に思った。趙から来た人があつたので、わけをたずねた。そこでさきの齊人の愚かさがわかつたのであつた。